

会報

第20号(平成26年1月9日発行)

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道札幌西高等学校

☎064-8624

札幌市中央区宮の森4条8丁目1番地

☎(011)611-4401/FAX(011)611-4403

高世研第45回研究大会に向けて

北海道高等学校世界史研究会
会長 赤間 幸人
(北海道函館稜北高等学校長)

新年あけましておめでとうございます。本年も、会員の皆様そして全道の高校で世界史教育に携わっている先生方の益々のご活躍をご祈念申し上げます。

さて、昨年8月9日に札幌教育文化会館で開催いたしました高世研第44回研究大会では、講師に、神戸女子大学文学部の山内晋次教授と東京大学史料編纂所の岡美穂子助教をお招きしました。古代の日本列島とアジア諸地域との国際交流史を専門とする山内先生と、南蛮貿易等の中近世移行期の対外関係史を専門とする岡先生のそれぞれから、最新の研究成果を踏まえ、東アジアを中心とした世界の歴史を見直す問題提起をしていただきました。

山内先生からは、旧来の「東アジア世界論」や中国の「冊封体制論」に対する疑問、「東部ユーラシア」や「海域アジア」の概念の提起があり、東アジアをグローバルにとらえる視点を、岡先生からは、ポルトガル商人により16世紀末に日本人奴隷がメキシコに渡っていたことを示す史料が最近発見されたことに触れながら、16世紀という「グローバル化のはじまり」の時代の日本を取り巻く状況について考える視点を示していただきました。

また、研究討議のコメンテーターとして参加していただいた北海道大学文学部の橋本雄准教授からは、海域アジアの世界史の面白さと難しさを提起していただきました。

東アジアを中心とした地域の歴史を、海域史の視点からグローバルにとらえて直してみるという考察を深めることのできた研究大会となりました。

こうした、これまでの教科書に書かれている既成事実を新たな視点でとらえ直してみるという作業は、研究者や教員だけでなく、生徒に考えさせる教材に活用することも可能であると思います。特に、新学習指導要領で最大のポイントとなっている言語活動の充実という観点から、主題設定学習等に取り入れて、生徒が話し合ったり、史料から読み取ったことを発表したりする学習活動に活用できるものと考えます。

言語活動としては、近年、小中高等学校、さらには大学においても、「学び合い」や「アクティブラーニング」等の取組が広がってきており、グループ等で他者とともに考え、課題を解決する力を高め、いわゆる「21世紀型学力」を育む実践が多く見られるようになってきました。グローバル化への対応として、そうした力が求められていることを考えると、世界の歴史をグローバルに理解する力を育てる世界史教育の役割は大変重要となっていると感じています。

教科書の膨大な基本事項(世界史Bの索引で約3000~4000項目)を前にして、世界史をグローバルにとらえる力を育むべく日々奮闘している全道の先生方にとって、生徒の学びの質を高めていくためにどのような取組ができるのか、一緒に考えていきたいと思います。

本年8月に開催します第45回研究大会で、ともに「学び合える」ことを楽しみにしています。

第44回研究大会記録

「新学習指導要領実施に際し、

国際理解を進めるための世界史教育」

日	時	平成25年8月9日(金)
会	場	札幌市教育文化会館 研修室403
講	演	山内晋次氏(神戸女子大学文学部教授) 岡美穂子氏(東京大学史料編纂所助教)
司	会	吉嶺茂樹氏(北海道有朋高等学校教諭)
コ	メ	橋本雄氏(北海道大学大学院准教授)
ン	テ	鳥越泰彦氏(麻布中学・高等学校教諭)
ー	カ	
記	録	鈴木香代子氏(北海道利尻高等学校教諭) 佐野祐子氏(北海道札幌西高等学校教諭)

講演

「『東アジア世界論』のみなおし
のために—前近代を中心に—」

神戸女子大学教授
山内晋次氏

東アジア世界史論については、さまざまな有名な学説や考え方がありますが、歴史研究、あるいは歴史教育のなかで中心的な位置を示す考え方の一つは国際関係史や海域史である。「非常に盛んでいいですね」などと言われるが、研究している当事者としてはまったくそのようには思えない。というのは、何冊かの本を手にとってご覧いただくとわかると思うが、この分野の研究は、特定の人物が行っているからである。あとで紹介する通り、いくつかの研究グループが重なりながら、20代、30代に知り合った研究者のグループがずっと研究をしている。だから、手放して盛んだとは言えない状況だとは思う。ただ、自分たちが今まで読み合わせてきたことはかなりの量と質はあるという自負はある。それで、私のように何人かが東アジア世界と東アジア世界史に興味を持つものがおり、その一環として、それまでの東アジア世界史

を壊そう、というより、それでは問題があるという方向に進もうと思っている。

まず、なぜ自分がそこまで東アジア世界史の見直しにこだわるのか。未だに様々な日本史の本においては、東アジアという地域がなにか一つの呪文のように唱えられているように思われる。ただ、中身を見てみると、ほぼ東アジア史というと中国・朝鮮・日本を指している。私はこれを新たな三国史観と呼んでいるが、もちろんこれは、天竺・震旦・日本という三国の焼き直しであり、頻りに冊封体制論を持ち出すという日本史の問題になる。これは未だに日本古代史・中世史でもそうであるし、特に気になるのが明代の中国と日本の関係を専門とする研究者であり、冊封体制というのが普通に書かれている。中国史の明史代、清史代の人たちも冊封体制という語を使っているというのが非常に気になる。

今使われている東アジア、或いは東アジア史、東アジア世界、あるいは冊封体制というものに窮屈さを感じている。それは、なぜそのなかに収まらなくてはいけないのか、いつまで使い続けるのか、という窮屈さであり、それに関して最も正面から考えたのは今から15年前に書いた論文である。改めて読み直してみると、考えが浅いところもあるが、「意外に的を射たことを言っているな。」というのがというのが正直なところである。

本日は今まで自分が感じている東アジア史や、冊封体制というものについて、窮屈さや疑問ということについて話をした上で、現段階での整理を

して「では、どうしたら越えられるのか」ということを話したいと思う。現段階での研究の整理については、昨年の『歴史』12月号に「東アジア史をめぐる動向は新たな段階に入りつつある」と述べられていたり、『歴史学研究』の「東アジアを考える特集」の中で研究動向が的確にまとめられたりしている。また、堀敏一氏の『東アジア世界の歴史』の「はじめに」のところで、堀氏がたどりついたところについて、「西嶋定生説」に対する批判も含めて、手短だがわかりやすく述べられている。これも非常に参考になると思う。

まずは「東アジア世界史」というと西嶋定生氏の説が、現在の東アジア史の基盤になっており、その東アジア世界論の一番のキーワードになるのは東アジア文化史と冊封と思われる。東アジア文化圏での一体性というものを強調し、その文化とは、単に共有されただけではなくて冊封体制という国際的な政治秩序、政治というものを基盤にして、その上に文化の共有が乗って一体性が形成されていくという二段階になっており、それが説得力を持つ。単に文化が共通するというのではなく、その文化は政治構造を媒体として共通性を持つという説得力を持つ。だから、いまだにこの説が使い続けられていると思う。

では、西嶋説とはどのようなものかということだが、ヨーロッパによる世界の一体化の前には、世界は小世界に分かれており、その中の一つに東アジア世界があり、その共通の要素が漢字、儒教、律令制、漢訳仏教、ということである。特に重要になるのが漢字であり、漢字を軸として儒教、律令制、漢訳仏典が共有されるという説である。

東アジア世界の範囲はどこかということ、中国、朝鮮半島、日本であり、さらにベトナムとモンゴル高原とチベット高原の中間、現在の甘粛省あたり、つまり中央・東アジアと中国の世界とのつなぎ目にあたるころまでが東アジア世界だと1960年ごろに冊封体制論を発表した際に述べられている。しかし、西嶋氏の論文を追っていくと、結局、ベトナムと甘粛は欠落している。ここが問題であり、西嶋氏は説明できないから落としたのであり、結局残るのは中国と朝鮮半島と日本だけである。そこに東アジア世界というものがあり、そこに国際的な政治構造を通じて中国の文化が伝播することで一体性を形成していく。つまり、文化圏と文化圏が一体となって政治世界を築いていく。では、国際的な構造圏とは何かというと、これが冊封体制である。西嶋氏は、まず冊封体制論

があつてその数年後に東アジア世界をつくりあげたということになる。

冊封とは何かということだが、中国の皇帝が周辺の国々に授与することによって関係が結ばれる、それによって形成される世界だということである。冊封体制は漢代に成立して隋唐期がピークであり、唐が907年に滅亡し、それ以後の東アジア世界というのは政治的な世界から経済的な世界へと変容していくが、東アジア世界というもののまともは残るといふことである。それが、明王朝が成立したことによって政治的世界と経済的世界が強固に結びついて東アジア世界が復活し、清代に拡大していき、19世紀に崩壊していく。そしてヨーロッパを中心とする世界に移っていく。そして東アジア世界は崩壊していくというわけである。こうした考えは東アジア世界史に大きな影響を与え、そして多くの成果をあげた。しかし、早い段階で理論化したことで、様々な疑問や批判もあったが、それが現在までも続いており、それを乗り越える新しいものはまだできていないといった観がある。では、西嶋氏への批判はどのようなものなのかということを私の関心に沿っていくつか絞ったが、まず根本的な問題として当初から批判があつたが、東アジア世界というのは本当に自己完結的な力を持つのかという問いかけがある。これを一番強烈に問いかけたのが朝鮮史の大家である旗田巍氏である。旗田氏は『岩波講座日本歴史4 古代4』の中で「一体行動などないのではないか」という問いかけを行っており、とても重要だと思われるが、それ以後の研究者たちからはほとんど無視されている。これはもう一度再検討されなければならないと思う。また、日本古代史の専門家である鬼頭清明氏も『日本古代国家の形成と東アジア』の中でやはり、「そんな世界があるのか」という指摘をしている。これは、西嶋氏によって周辺諸国に位置づけられたとする研究者たちが問題を提示しているものであり、要するに「中国中心史観であり、周辺諸国の主体性や主体的発展というものを重視しないといけないのではないか」ということである。それは、理屈としてはそうであり、批判としては適切だが裏面では崩すのは難しいと言える。

東アジアというのはどの範囲なのかということだが、西嶋氏は、日本・朝鮮・中国・ベトナム・今の甘粛省のあたりとした。しかしこれにはかなり早くから批判があり、当時中国が国際関係を結んでいたのは、いわゆるその東の方だけではなく、

例えば中国の西の吐蕃、北の突厥、あるいはウイグル帝国、南の方だと南詔があり、そうした中国全体の四方向の国際関係を捉えないといけない、東の方だけ取り出してもいけないのではないかという批判がある。菊池英夫氏が「西嶋氏の説は、あくまでも日本史を説明するだけの説だ」ということをかなり早いうちに明確に述べている。

三番目は歴史世界の担い手についてだが、当然、西嶋氏の世界論では冊封体制を支える支配者の相互の関係というのが中心になるわけだが、それだけで東アジアの構成を見ることができるといえることである。藤間生大氏により、国際的な動きをする商人や手工業者、仏教徒など、支配層以外の人々まで含む必要があるのではないかとかなり早い時期から主張されている。ただ、これに対しても民衆の動きというのは支配者間の関係を通して実現されていくということであるからその両方を見ていかないといけないのではないかと批判があり、それはその通りだと思う。今回レジュメにまとめ直すために西嶋氏の話を読み直していたところ、今まで見落としていたことで興味深いのが、西嶋氏の視野の中に、庶民生活まで含めた見方というのが入っていたということがわかったことであり、やはり重要なのは支配層だけの文化の共有ではなく、より一般の庶民の生活の部分にまで踏み込んだ文化の共有だということであり、それがわかるのは、日本でいえば平安時代の後期から鎌倉時代にかけての日宋貿易あるいは日元貿易にかけて、より下の層の中国の庶民文化的なものが受け入れられて、それがいわゆる次の室町以降に発展するということである。

次に東アジア世界の変貌と書いたが、これは西嶋氏がいうように唐の滅亡を機に政治的な世界というものが後ろのほうに退いていき、前面に出てくるのは宋代の経済を中心として広域圏と結びついた東アジア世界という図式である。それに関して西嶋氏は次のようなことを言われている。この世界は五代・宋の国内経済の発展と対外交渉の展開の上にもたらされるのである。ただ、整理しなければいけないのは国際的な政治がなくなったのではなく、それはありつつもこれを越えるような大きな交易が展開した世界だということである。その経済を中心とする世界というのは、そこを秩序化し安定を維持するための機構が欠落していた、要するに冊封体制というようには政治的には縛れないので、無秩序に近いような交易でいろいろなトラブルが出てくる、その1つが倭寇の跳

梁ということに繋がっていく。そのような危険な世界、秩序を安定させるようなまとめ役がないという世界が、明王朝の出現によって政治的な冊封体制と経済的なものの結合によって、より強固な東アジア世界ができて海上貿易に関しても秩序化が行われていくという、非常にわかりやすい説を立てていく。しかし、私が前にまとめた論文の中で、10世紀から13世紀までの日宋貿易の時代の日本と高麗、東南アジア諸国の対外交渉の状況に関し、中国資料からという制限はあるが比較史を試みた。そうしてできた結論は、西嶋氏の言うような国家や権力が関与しない私貿易ととらえていいのかという大きな疑問である。どういうことかということ、中国からやってくる貿易商人と現地の主権とか国家というのが相互依存しつつ交易が展開されていき、その中に政治秩序というものもつけられていく、という状況が見えてくる。私は「もたれあい」言う言葉で表現したが、唐の滅亡以降の東アジア世界を見る際、王権と対外交渉の直結、相互依存関係を見なければいけない。西嶋氏のように政治的な世界はあるといいつつも、そこにあまり注目せずに交易があつて無秩序になったというのはやはり言い過ぎだろうと思われる。各地の王権と海上交易の関係を捨象してしまうような西嶋説では、10世紀以後の歴史をとらえきれず、そこにある政治的な思惑や秩序の両方をうまくバランスをとりながら見ないとはいえないと思う。

そこで私の仮説というのは、9世紀以降、中国の商人達が積極的に海に進出するようになり、周辺諸国ではこれまで中国の商人などが来るのが少なかったのが、急に来るようになった人々をどう扱うかということで、その地域の王権や国家は何とかその者達を秩序の中、自分中心の世界観の中に彼らを取り込もうとする。彼らを朝貢してくる外国人という形で取り込み、貿易を上から支配していく、そして彼らの政治的支配を満たしていく、そして商人達にとっても朝貢するという外国人の役割を演じることで自分たちの交易にもメリットがあり、安全保障がある。これを「もたれあい」の関係と表現したわけである。だから、中国や周辺諸国家・王権は、貿易商人を朝貢してくる外国人という形で自分たちの自己中心的な世界観の中に取り込みつつ交易管理体制を設定し、ある程度秩序のある管理体制が重なり合いながら東アジア海域まで連鎖していくということでこの広い海域において安全保障が行われていただろうと考

える。

西嶋氏の東アジア世界論の発想がどこから来ているか、これがかなり重要であり、これに特に発言されているのが李成市氏であり、結局西嶋氏の説というのは1950年代の当時の中国・朝鮮半島・日本・ベトナムを巡る国際的な現実的な課題、要するにアメリカのアジアに対する支配の強化、それと社会主義的陣営の対立という戦後の危機的な現実というものをバックに考えられた面があるということを指摘しており、それはその通りだと思う。その際の基盤になっているのが上原専禄氏の世界史の構想である小歴史世界が世界各地に並列していてその中の1つが東アジア世界であるという考え方や国際社会の現実に基づいて考えられたもの、つまり結局現代のものを過去に投影した西嶋氏のビジョンでしかないということになる。より根本的な話として、結局西嶋氏の中には現在の国民国家という1つのユニット、それがいくつもあって関係を結び合うような世界史しか考えていないのではないかと、そもそも日本史という一国史を克服するような意識さえ一切ないのではないかと、これは李成市氏をはじめ他の研究者も指摘している。ここも後の研究において誤解されているところだが、西嶋氏の東アジア世界論は一国史を解き放つために定義されたと思っていたが、実はそうではなく、結局西嶋氏の議論というのは日本史を説明するための議論でしかないのではないかと、菊池秀夫氏や李成市氏、村井章介氏も言われており、私もそう思う。ただ、これに関しては、日本史を説明するには、日本は冊封体制に入っていないなど様々な矛盾はあるが、そこは西嶋氏はうまく説明している。

次に、東アジア世界史を支えている冊封体制論に対する批判も早くから出ており、その研究史の整理や課題などは、一番に現時点ではまとまっているものが金子修一氏の『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』所収の「東アジア世界論」である。主に冊封体制論に対してどういう形で批判が行われているかということ、そもそも冊封体制というもの、中国王朝と周辺諸国の関係の一部でしかないという的確な指摘を最初にしたのは堀敏一氏である。確かに、一部では中国と周辺諸国の外交関係とか国際関係は冊封体制によってすべて説明できるように誤解されているがそんなことはなく、冊封しない国のほうが多い。中国の外交関係で、一番強硬なのは周辺諸国自体を滅ぼすことであり、一番緩いのが朝貢だけする日本的なタイプ

の関係であるが、その何段階かある1つの外交政策として冊封があるというとならなければいけない。堀氏が重要視したのが「羈縻」と表現したものである。「羈縻」というのは、牛馬の手綱のことであるから、皇帝が手綱でもって牛馬を操るように周辺の諸民族を操っていくというのが「羈縻」支配であり、これを重視しなければならないと主張されており、当否はわからないが重要な視点だと思われる。

また、西嶋氏の論文を見てみると、あたかも冊封が検証されたかのように述べられているが決してそうではない。論文の中心となるのはあくまでも魏晋南北朝・隋唐代の中国資料であり、冊封体制の検証時期というのもその間でしかない。検証地域も中国・朝鮮半島・日本のみで、特に中国と朝鮮半島の資料になる。なぜかということ、日本は冊封されていないからである。つまり、限られたデータしかない。西嶋理論を引っ張っている人はもっとはなはだしくて、中国の全時代に通用するような引用をしている。特に問題なのは、宋代以降にこの理論を適用することであり、気になるのは明代史の専門家が普通に冊封体制を使っているのかということである。これに関しては何の論証もされておらず、全く検証されないものを全時代に適用されているのかということである。地域に関しては西や北の地域の関係について、西嶋氏はそこを全く捨象している。中国王朝と周辺の関係というのは、突厥や吐蕃、ウイグルとはまた別の理論があるということで収め、自分では東の方だけ検証すると。実証に使ったのは中国と朝鮮半島と諸国との関係であるにも関わらず、中国を中心とする全近代の全体構造を説明するように受け止められているが、決してそのようなことはない。

例えば、唐代の例を見ても、吐蕃との会盟があるが、唐が一番警戒していたのは吐蕃であり、のちにはウイグルも入ってくる。チベットは南詔王を冊封したり、突厥やウイグルの王を時には冊立するなど、皇帝がその地域の王として認めるということを行う。これは、冊封とどう違うのかということもあり、吐蕃やウイグルに関しては、皇帝の娘や姉は政略結婚させられたが、こうしたことは、東アジア諸国では存在しない。また、当初は東アジアに認識されていたベトナムや甘粛あたりは西嶋氏の論文からいち早く脱落しており、これは明確な説明ができないからだと思う。

ベトナムに関しては、大阪大学の桃木至朗氏が、ベトナムが中国の支配圏から脱出していくため

に、逆に中国化を図るといふ主体的な流れがあるということも言われている。また、李成市氏が言われるような周辺諸民族間の相互の交流、政治関係も重要である。特に朝鮮と倭との間の漢字などの文化の受け渡しを考えると、一概に中国から放射状に周辺諸国にのびた一対一的な関係と絶対とらえてはいけないと李成市氏は主張しているが、その通りだと思う。今後冊封体制に関してはどういふ課題があるか、それをどう克服していけばいいのかとことは、未だに不明な点が多いが、一番正面から論じられているのは金子修一氏だと思う。金子氏は、非常に重要な指摘をいくつもされているが、唐以前の資料において冊封を見いだすのは非常に困難であり、東南アジアの室利仏逝(シュリーヴィジャヤ)の王を冊封したことや、吐蕃が南詔王を冊封したという史料に、冊封とあるのが例である。冊封とは、基本的に明清代の用語である。また、中国の史料に即して冊封体制の存在を証明しようとする史料の立場から困難であって、それをしようとする史料の立場を単に祖述するだけの結果に陥る。つまりあくまで中国中心に歴史は書かれているので、中国側の観念を語っている。結局それを実態と誤解してしまう可能性がある。再検討の1つとして、そもそも冊封とは何か、ここで与えられる周辺諸国の王に与えられる、例えば「新羅王」や「渤海郡王」などの封号が地域と時代によって区分されている、それを細かく詰めていくとどうなるかという、冊封という行為そのものの見直しが必要だろう。また、中国が周辺諸国の王に与える官爵はどれが冊封のエッセンスなのか。堀氏の、冊封より羈縻を重視すべきという中で、冊封と羈縻はどこが違うのかという根本的説明もまだなく、これも考えていかなければならない。

西嶋氏の述べられている所の漢代の内臣と外臣に関してであるが、中国の内臣に対する国内的な秩序が周辺諸国にも拡大して行く制度、内臣と外臣の重なりを冊封ととらえていく。しかし金子氏も指摘するように、内臣、外臣に関する根本的な見直しが必要という動きになっており、そうなれば冊封そのものも成り立たない、これが今後の課題であり注目されている。また、「朝貢とは何か」、「羈縻とは何か」、「冊封とは何か」といった基礎的な研究もほとんど進んでいないといった現状にある。こういう現状の中で、非常に早い段階で無理に理論化したのが西嶋理論であるとも言え、相当な問題が含まれているということになる。で

は、新しい展開をどう持つて行くのか。従来の東アジア史、中国史では、視野が非常に窮屈であり、むしろ、ゆるやかなつながりとか構造の中でより柔軟な仮説的地域を幾つか作って探っていくなかでより広い範囲、歴史的な視野を広げていくのがよいのではないかと思っている。そこで、最近打ち出しているのが東アジアを越える東部ユーラシアという地域であり、海域アジアである。こうした広い地域の視野というものを提言している。これらを提言することによって、一つは東アジアだけでなく中国や中国史の相対化ができていく。中国という固まりがずっと続いていると誤解されていることが問題になっているが、少なくとも華北と江南地域というのは分けて考えなければならず、隋唐期、特に唐代に日本の遣唐使が行くのは華北の世界、それ以後の日宋貿易や日明貿易で繋がっているのは江南の世界で、別々に考えなければいけない。一体性はもちろんあるにせよ、そこは分けて考えないと繋がりの独自性や面白さが見えて来ない。

また、従来のアジア史を相対化すること、また日本史研究者に不足している世界史の繋がりの自覚が重要だと思う。「日本史は日本で完結しているからいい」という日本史研究者がいかにか多いか。東部ユーラシアの視点で言うと、その中では、西嶋氏が唐の滅亡、東アジア世界の変貌で終わらせてしまった部分の、近代の国際関係や国際秩序の研究が進んでいるということである。例えば、澶淵体制や澶淵システムといわれるような宋と契丹の関係、契丹の方が絶対的に強大な中で澶淵の盟によって一応平和な関係を保ちながら周辺の西夏や大理、高麗との関係が全体的に動いている時代のような、それまでとは違ったシステム、中国だけが中心ではないシステムを積極的に考えていくという動きがある。つまり、西嶋氏が検証できなかった唐滅亡後の国際的な秩序を積極的に考えようとする新しい動きが見えているということである。東部ユーラシアという地域を、私が有効だと主張する根拠の一つが7世紀後半に朝鮮の支配をめぐって高句麗・百済・新羅の3国が唐と結びつき、さらに倭が介入して行って最後に朝鮮半島に統一支配が残る、という動きがある。600年代の半ばから後半にかけての東アジアの動乱という、西嶋説の中でも冊封体制の証明の重要な、核になる部分である。その資料を調べていくと、この時の動乱は実は東アジアだけの動乱ではないということがわかる。より広域的な視野、東部ユ

ーラシアから見ると、唐王朝のこの時期の主要な国際問題の推移というものをたどると、突厥問題がまずあり、その次に朝鮮半島問題が670年代を境に中心となり、そして吐蕃問題に移って行く。これは同じ將軍たちが突厥や朝鮮半島に投入されたり吐蕃戦線に投入されたりと、有名な將軍たちが転々と動いてゆくわけである。統一新羅の誕生で一番重要なファクターになっているのは吐蕃が強化したことである。660年百濟、668年高句麗が滅亡、その後新羅と唐が朝鮮半島支配において争うようになり、670年代半ばに新羅が結局半島から唐を追い出して半島支配が成立する、というのが今まで語られている。なぜ670年半ばなのかというと、新羅の民族闘争だとか朝鮮の人たちの力なのだとすることで美化されているが、決してそうではない。吐蕃問題が深刻化したため、新羅に関わる余裕がなくなり、唐は朝鮮半島から撤退していくということである。その隙に新羅は朝鮮半島を完全に支配し、それを8世紀に唐が認めることになる。それは、文献にも「今は吐蕃が大変だから新羅征伐は無理だろう」とはっきり現れている。つまり、朝鮮半島問題に関して、東アジアだけで考えていても新羅の成立は理解できず、吐蕃問題という視野が必要になる。これは、東方ユーラシアという視野の必要性というものが一つ証明できるだろうということである。日本史では「白村江の戦い」というものが、非常な大事件であり、それによって律令国家へのアクセスが一気に踏み込まれていくとされる。しかし、東方ユーラシアの中では「白村江の戦い」というのは小事件に過ぎず、そうした相対化が必要になると思われる。「白村江の戦い」というのは、実は唐に大きな影響を与えていて世界史的にも大きな影響があると思いたいのは日本史としてはよくわかるが、冷静に見ればそうではない。唐にとって倭というのは警戒すべき存在であるのは確かだが、むしろ注意しなければならないのはチベットの動きだということである。海域アジアという一つの視野に関しては、一国主義や国民国家史観、あるいはヨーロッパ中心主義のようなものに対して世界的な問い直しが行われているなかで、海域アジア史という動きも出てくるということ、また、陸の視点とは違った新たなまとまりをつくらうということで海域アジア史とした。従来のアジア史とは一線を課した部分を考えようということである。

海域史というと、どうしても海の歴史というイ

メージになるがそうではなく、自分たち研究者の頭の中には中央ユーラシア史が入っている。ソクド人の動向が海に影響を与えたり、ムスリム商人の動向が南の海の世界と繋がっているということで、海の世界と陸の世界をつなげ、相互的に見ていくという広い視点で研究したい。アジアだけなのかということではなく、アフリカやオーストラリアが含まれていてもいいと思う。要は「今までと違った考え方をしよう」ということである。自分の中のイメージは日本列島から紅海、ペルシャ湾に広がる地域、そしてそれと関わる内陸である。

自分が書いている本の中では「硫黄の道」というものもあるが、日本産の硫黄が日宋貿易の開始とともに中国に輸送され、鹿児島硫黄島でも硫黄鉱山の開発が進んだ。また、中国には、東南アジアや西アジアから硫黄が流れていたということから、この時期に広い地域で硫黄が運ばれていたということがわかる。その東の端が日本である。そういうことは今までの東アジア史の世界においては決して見えない世界だった。また、資料でもわかるように10世紀は中国が火薬を独占していた時代であったが、13世紀のモンゴル帝国の拡大とともに西方にも火薬の技術が及んでいく。また、東南アジアにも広がっていった。14、15世紀の硫黄の国際的なルートは一極集中から多角化、多極化になるわけであり、火薬技術の世界的な拡散である。これらも海域アジアの有効性を示す一つの事例であると思う。

ただ、これらについては厳しい批判も頂いており、村井章介氏からは、「内陸世界と海域が曖昧だ」、「西嶋氏の理論をどれだけ超えられるのか」、「国家と国家の関係史を超えていない」、「地域設定が恣意的ではないか」などの批判があった。ただ、大切なのは「単に枠組みを変えるのではなく、思考パターンを変え、どう広げるかによって、今までの東アジア世界の理論をどう乗り越えていくか」ということだと思われる。

今後についてのまとめは、「なぜ宋代以降（特に明代以降）、冊封体制で説明する必要があるのか」ということ、「冊封体制の“体制”という言葉はいらぬのではないか。冊封というのは重要な中国王朝と周辺諸国の関係の目印にはなるが、『体制』とつけてしまうとシステムだと思込み、事実を見誤るのではないか、しかも証明されていない明代に使うことはどうなのか」ということである。つまり、冊封を使わなくても明代の歴史は

描けるし、海域アジアというのも描けるということである。明代に解明されていない冊封というのはそもそも何であるか、ベトナム・琉球・日本・朝鮮の史料などがあり、こういう冊封の比較史を研究することによって、冊封というのは硬い体制ではなく、被冊封国側における儀礼であるとし、足利義満の冊封儀礼などは今までの理解とはだいぶ違うという「柔軟な関係」という理解の研究や、研究者ですら誤解があるが、朝貢＝冊封ではないし朝貢＝服臣関係の成立でもないということの研究を進めたいと思う。大切なのは、固定化されたものからの柔軟な視点・視野ということになる。



講演

「南蛮貿易とアジア人奴隷—大航海時代のユダヤ人ディアスポラとの関連を中心に—」

東京大学史料編纂所助教

岡 美穂子氏

私自身、ユーラシアに関する研究に携わっているが、羽田正氏から「世界というのは自明として存在するのではなく、歴史研究者によってつくられたものなのだ」ということをお聞きし目から鱗だった経験がある。また日本の歴史は、学会にとってどの説が一番今のトレンドなのかによって研究が進められ、組み立てられているということが

あり、今後さまざまな議論がなされていくだろうと思う。先ほど、昼食の際に橋本氏から「国家とは何だろうね」という言葉をいただいたが、私は、国家というのは大航海時代までははっきり存在せず、国家が存在するのは主権国家体制が大航海時代の後にできて、国家がそれに従って動いていくと考える。大航海時代は、ポルトガルとスペインの国王たちが重商主義にのっとり勝利をおさめたと考えられがちだが、実際はそうではなく、国王は商人からの利得や税金、権利に対して支払われる報酬などによって国家財政を満たそうとしていたのが本当の所である。だから、商人が必ずしも国家に帰属意識があるものではないことを、特にポルトガル人のアジアでの活動について主張してきた。

その中で、タイトルに「ユダヤ人ディアスポラ」と出てくると何かと思われるかもしれないが、ユダヤ人と言ってもこの人達は改宗ユダヤ人あり、表面的にはキリスト教に改宗した人達である。資料によると、中国には600人の人の住む集落があり、土地の支配人に対し彼らの儀式を行うために、家屋と土地を与えてくれるようにしなければならぬと書かれている。彼らが作ろうとしていたことは、ユダヤ教のシナゴグであった。イエズス会士がインドの総長あてに送った告発文では、そのうちの300人以上が新キリスト教徒であると述べられている。ポルトガルやスペインにおいて、ユダヤ人というのはマイノリティーではあるが、16世紀のポルトガル人の学者が改宗ユダヤ人であったことはよく知られている。例えば、世界史の教科書の表紙にも載っているカタロニア図を作ったのは地中海のマヨルカ島のユダヤ人の地図学者集団であり、彼らが活躍した時代はマヨルカ島がアラゴン王国に属していた時代であった。

1492年にイベリア半島で起きた三つの出来事とその後の世界を変えたと言われる。グラダナの滅亡とユダヤ人追放、コロンブス航海である。ユダヤ人は強制改宗をさせられたが、このとき裁判による処刑はあまりおこらず、実際に処刑された人は全体の10%に満たない人数であった。この際のユダヤ人の亡命先というのは主にアントワープであり、アムステルダムやロンドンが亡命先になるのは少し後の時代である。一番の亡命先はアントワープとイタリアとアフリカとなるが、最近クローズアップされているのが、ポルトガル人が海洋ネットワーク地域の交易に介入していった

とされているアフリカ・インド・東南アジア・そしてマカオのポルトガル商人の居住地である。

大航海時代が一番栄えた港町はどこかと言うと、リスボンではなくアントワープであり、リスボンには商品はある程度入ってくるが、アントワープは金融の中心であった。ドイツの資本家達がアントワープに資本を持ち込むようになったことでアントワープは栄えていくことになる。そして異端審問の時代にはポルトガル商館というものができあがるが、ここは異端として追われた人達によって作られた建物である。オスマン朝に受け入れられた亡命ユダヤ人は、集住地区をイスタンブールに作り、これは現在のガラタ地区に当たるが、この地区にはモスクだけではなくシナゴグも建っている。

先ほど述べたとおり、こういったオスマン朝やイタリア、アントワープ以外にも、ポルトガルやスペインが海外で覇権を確立した先が、ユダヤ人の亡命先となった。メキシコの辺りで、ユダヤ人コミュニティが確認されるのは、メキシコシティやヴェラクルスなどの大西洋貿易のメキシコの拠点であり、グアダハラ、銀山のあったサカテカスなどにも亡命ユダヤ人の集落が確認できる。

ところで、ユダヤ人のメンデス・ベンベニステはイスタンブールに移住してからナッシという姓に改めるが、マカオにもナッシという商人が17世紀初頭におり、この人物は有名なマドレ・デ・デウス号事件とも関係がある。この事件は、1609年に長崎停泊中のポルトガル人船長アンドレ・ペッソアの船が長崎奉行と有馬晴信の襲撃を受けて沈没したものであるが、その背景には、有馬晴信の朱印船が1608年にマカオに寄港した際に発生したマカオのポルトガル人とその乗組員との間での殺傷事件、いわゆるマカオ事件と呼ばれるものがあつた。この事件の影響は江戸幕府の禁教政策に強い勢力を与えることになり、マカオとの通商も3年間停止することとなった。ナッシの名前は、マカオでアンドレ・ペッソアの船に銀との交換を目的に金を委託した商人として登場する。この委託商売は長崎のイエズス会の仲介で行われることになっていた。しかし、船が沈んでしまう前に、ナッシ他マカオ商人がイエズス会に委託した金が荷揚げされていたにもかかわらず、船が沈没した後、イエズス会はマカオの商人に対して、船が沈没したので自分たちに返済義務はないということをして、委託業務が不成立であったことを理由に主張する。でも、しかし、実際には委託さ

れていた金は沈没前に陸揚げされていたことが判明し、ナッシら他4名の商人はイエズス会に対して委託していた金の返還を求める訴訟を起こした、ということが明らかにされている。つまり、このナッシという人物が、日本との交易にも多少ならず影響があつたと言つていいと思われる。

また、このマドレ・デ・デウス号が沈没した背景には、もう1隻同じ年にマカオから入港していた私貿易船が関係しているのではないかと、私は考えている。この船の船長は日本人とポルトガル人の混血のヴィセンテ・ロドリゲスという人物であつた。そして当時の長崎奉行は、ペッソア、つまり正式なポルトガル国王の代理とも言える存在であるカピタン・モールではなく、このロドリゲスの方に朱印状を与えた、ということが史料上は確認される。ただそれが事件に結びついているのかどうかというのは、まだ明確でない部分がある。

ここで、イエズス会の名前が出てきたが、宗教改革に対抗して起こったカトリックからの内部刷新運動であるはずのイエズス会が、なぜ改宗ユダヤ人の存在を認めるのか、という点を、不思議に思われるかもしれない。実はイエズス会というのはヨーロッパの修道会の中で一番、改宗ユダヤ人の入会に積極的であつた修道会であつた。それは、もともとユダヤ人が、医学や学術に優れた人や、もともと銀行業などを営む一族が多かつたことから裕福であり、入会に際して多額の寄付をすることで、初代総長ロヨラから2代目総長ディエゴ・ライネスの時代までは、改宗ユダヤ人がイエズス会内部で非常に優遇されていたということが、最近のイエズス会の研究者によつても言われるようになってきた。ところが、この方針は、3代目総長メルキュリアンの時期になって、彼が改宗ユダヤ人がイエズス会の上層部にいることが気に入らないイエズス会士たちによつて選ばれたということもあり、強硬な改宗ユダヤ人追放方針が推進された。その追放は、会からの追放という極端な場合もあるが、僻地への派遣、いわゆる左遷というのもあり、日本にも左遷という形でやってきた人物がいる。豊臣秀吉のバテレン追放の後に2代目の日本準管区長になったペドロ・ゴメスは、もともとヨーロッパで非常に知られた自然学者、自然哲学者であつたが、彼が改宗ユダヤ人であることがよく知られていたために、日本まで左遷されたと考えられる。また、初代のマカオの聖パウロ学院長であり、天正遣欧使節記の著者としても有名なドゥアルテ・デ・サンデは、リスボンのイ

エズス会学院の人文古典の教授であったが、インド、その後にはマカオと極東に派遣されてきた改宗ユダヤ人であることがわかっている。おそらくこのイエズス会と改宗ユダヤ人がマカオで共存した背景には、マカオにいる改宗ユダヤ人商人が良いキリスト教徒で、教会に多額の喜捨を行う存在であったから、ということがある。

ここまでユダヤ人の話をしてきたのは、ユダヤ人の異端審問記録に、日本人がはっきりと法廷で証言した記録が出てくるからである。つまりところ彼らは改宗ユダヤ人の証人の例であって、その改宗ユダヤ人との関連で出てくると言っても過言ではない。おそらく、こういう事例は今後も発掘しうるであろうと思われる。こうした異端審問の記録に、アジア人奴隷の個々の事例というのが多くあるということは、これまで実際に調べてはこなかった。その史料には、ガスパール・フェルナンデス・ナトゥラル・デ・ラ・イスラス・デル・ハボンと書かれており、以下は彼自身の証言となっている。この内容については省略するが、意味は、ガスパール・フェルナンデス、イスラスというのは島、島嶼部、デル・ハボン、ハボンというのは日本ということ、日本諸島のナトゥラル、出身であるという意味である。また、彼と一緒にいた別の日本人奴隷は、ナトゥラルではなくてカスタタという、いわゆるカースト、人種を意味する言葉が使われている。

マカオのペレス一家というのは、新キリスト教徒であり、表面上はキリスト教徒として教会にも喜捨をしているが、ポルトガル人の間では、異端、隠れユダヤ教徒であるということが知られていたという一族であった。マカオには異端審問所が導入されてはいなかったが、ゴアの異端審問所から時々異端審問官が派遣されてきて調査を行うということがあった。そのために、このペレス一家は、1585年8月16日にマカオから長崎に拠点を移したが、彼らは日本人だけではなく、家内奴隷、召使いを多数所有していたことがわかっている。その後またさらにマカオから異端審問官がやってくるようになったという情報を得て、長崎からスペイン領フィリピンのマニラに移動したが、ついに1596年にはマニラの異端審問官に捕縛されて有罪判決を受けた。そして、再審のためにメキシコシティの異端審問所への送致が決まり、1597年にフィリピンを出港するが、太平洋上を横断した結果、アカプルコに入港する直前に、この日本人奴隷たちの所有者にあたるペレスというポ

ルトガル人商人は病死してしまう。奴隷は当時所有者の財産であるとされていたので、異端審問所で有罪判決を受けたペレスの財産である3人の日本人奴隷はペレスの所有財産として他の人に売却された。その後、1599年になってからガスパールという日本人は、自分たちがこういう奴隷身分とされるいわれはないということを裁判で主張するために訴訟を起こした。5年かかってようやく、1604年8月5日に、奴隷身分が不当であるとして、所有者からの解放が決定されるということになった。ルイ・ペレスの日本人奴隷というのは3人名前が知られている。いずれも日本名ではなく、おそらく洗礼名がガスパール・フェルナンデスとミゲル・ジェロニモ、ベントウーラという人物で、詳細が判明するのは、自分で来歴を供述しているガスパールのみである。彼は、天正5年(1577年)、豊後で生まれ、父親から人買いの手に渡る。当時8歳であり3年の年奉公、価格が決定し、長崎に連れてこられてイエズス会士のもとに預けられ、ペレス一家に売却されて、その後行動をともにした。ミゲル・ジェロニモは、ポルトガル人の奴隷商人フランシスコ・マルティンスがマニラに連れていき、ペレス一家に売却されたことが裁判記録によってわかる。ただし、メキシコにおける解放訴訟にはミゲル・ジェロニモは加わっておらず、その理由は不明ではあるが、その時点までに亡くなっていたか、或いはすでに解放されていたかということだと思われる。

こういった事例が日本人の「太平洋渡航記録」として正式に公式文書に見られるものとしては最初のものとして確認されるが、実は中南米の日本人奴隷、或いは解放奴隷の存在などはこれ以前にも複数の事例として知られている。一番古いものでは1596年にアルゼンチンのコルドバで、慶長3年生まれでフランシスコという日本人奴隷が解放を求めて裁判を起こした。当時の彼の所有者は、新キリスト教徒のポルトガル商人のディオゴ・ロペス・デ・リスボアであったが、彼に関してはスペインでも研究がなされていて、隠れユダヤ教徒であり、教会への多大な喜捨を行っていたことが伝わっている。また、ペルーのリマでは、1613年の住民台帳に日本人に日本人20名、うち男性9名、女性11名の戸籍が作られている。当時のリマ市の人口というのはだいたい1万人くらいであったと言われているが、うち中国人は38人、日本人が20人であり、名前の詳細がわかる人とそうでない人がおり、特に誰かの所有にな

っている人の場合は、詳細はわかりづらい。その中で来歴がわかる人にトマスとマルタという夫婦がいる。ゴア生まれということになっており、その当時、ゴアには日本人がいた、ということがわかる。彼については顔に奴隷の刻印があるということで、かなり深刻な奴隷であったという見方ができる。この夫婦はペルーのリマ市の日本人の代表格であったようで、詳細な記述がある。もとはペルー国王の孫である裕福な貴族が所有者であり、この住民台帳が作られた時点では解放されている。二人の間には息子がおり、1606年生まれ、名前はフランシスコである。で、この夫婦が、日本人達の世話役的な存在であったということが史料からわかり、たとえ20人のコミュニティであっても、彼らが遠く日本から離れたところで労働意識や連帯感を持って暮らしていたということがわかる。また、マカオ生まれの日本人とスペイン人の混血の人が、やはり日本人として記載されている。他には、長崎出身の日本人で、リマ市内で雑貨屋を営んでいた人がおり、インド人の妻がいるが、妻はもともと奴隷で300ペソ支払って身請けした人がある。日本人の全体的な特徴としては、日本人男性の多くは自由の身で、彼らの大半の職業は皮革製造業、服飾人、洋服の仕立て職人であったということである。中南米にいるということはスペイン人が関わっていると思われがちだが、ポルトガル商人に売られ中南米につれてこられている。メキシコのグアダラハラにはファン・デ・パエスという日本人がおり、この人は解放奴隷であると言われている。このファン・デ・パエスという日本人が出てくるのは伊達政宗が送った慶長遣欧使節のころである。

これらが南米関係の資料1つ1つの事例ではあるが、日本人が16世紀から17世紀まで、確かに中南米に存在していて、20人程度ではあるがコミュニティらしきものを築いていたということを見て取ることができる。

ここからが今日のテーマであります海城アジア史との関連であるが、こういった日本人奴隷が生じる国際的国内的環境というものをお伝えしたい。日本では中世以来、特に戦国期には「濫妨狼藉」「乱取り」という形で人の略奪が横行する。特に島津と大友のとの戦争においては、島津軍が大量の大友領内の人間を略奪していた。おそらくそれを売る、或いは長崎まで連れて行ってポルトガルに売ったであろうと思われる。ちょうど戦国時代という、人間の売り買いが激しい時期にポル

トガル人が日本にやってくるということが重なったというわけである。

中南米とヨーロッパのいわゆる大西洋三角貿易でアフリカから奴隷を供給すると言う話が教科書には載っているが、これは教科書レベルでは「ポルトガルが」となっているが、正確には「ポルトガル商人が」であり、大西洋の奴隷貿易においてポルトガル商人の存在というのは非常に多く知られているが、アジアにおいても奴隷はポルトガル商人の取引商品の一つであった。アフリカのモザンビーク人は、1550年以前にすでに中国のあたりにやってくる。マラッカはポルトガル人の進出以前から東南アジアの人身売買の中心地であり、島嶼部から大陸部に奴隷が運ばれ、農産物と交換されていた。つまり、ポルトガル人がマラッカで奴隷貿易を始めたというよりは、奴隷がそこで行われていた貿易ネットワークで取引されていた商品の一部であったということだと思われる。中国人の奴隷は1540年代には相当数がスペインで存在すると確認されている。こういった奴隷は、船や要塞とかで働かされているが、日本人や中国人というのは肌の色が比較的明るい、ヨーロッパの人種観という色が白ければ白いほど高級であるということから、比較的高価な値段で取引されたということである。

16世紀の東アジアの奴隷貿易の推移は、当時の東アジアの貿易、紛争と非常に密接な関係がある。というのは、ポルトガル人が最初に取引を始めたのは東アジアの奴隷では中国人であったからである。1520年頃には、ポルトガル人が広州沿岸を倭寇と同じように略奪をしていたと言われる。明朝側の記録ではそれは誘拐であったとされるが、ポルトガル人たちは正規に購入したという意識があったということが資料にあり、おそらく中国側に人身売買を斡旋した商人がいたと考えられるが、政府当局としては認めがたく略奪ということにしてしまったのではないかと考えている。ポルトガル人は1555年に正式に通商を許されるが、16世紀前半のポルトガル商人の東シナ海での活動というのは後期倭寇とほぼ同一といってよいというぐらいの広域活動を行っている。最初にポルトガル人が取引をはじめた東アジアの奴隷が中国人であるといったのは非常に深いことであり、1560年に日本にやってきたカピタン・モール・マヌエル・メンドンサの記録では、彼は豊後と鹿児島に入港し、それぞれの港で多数の中国人を購入したと言っている。ということは、豊後

や鹿兒島には外国人商人に売だけの中国人奴隷がいたということになる。ただ、このカピタン・モール・マヌエル・メンドンサは、その時に購入したのはほぼ中国人で、日本人はほとんど買っていないかったということを言っている。日本人の奴隷の取引が急激に増加するのは長崎の開港の以降である。それまでは交易というのは組織化されておらず、どの港にいつ船が入るかということがわからないので、商品を準備して待っているというものはなかったが、長崎がポルトガル船が入港する港になってからは、そこに商品を持っていけば南蛮船と取引ができるという認識ができあがったと言える。ただし、この時期の人身売買に関する様々な記述では、豊後出身者で売られる人が非常に多い。ペルーの住民台帳の記録では、彼らの出身地は長崎であると書かれているが、長崎を出身地としているのか、出航地が長崎であったとしているのかは明確ではない。ただ、ヨーロッパの資料でも、豊後出身の人が出てくるのは、島津軍が大友領内の人を略奪し奴隷としてしたという記述が日本側にもあることと矛盾しない。

長崎が開港されて日本人奴隷が増えるが、その後の秀吉のバテレン追放令、そして文禄・慶長の役で日本に連行されてくる朝鮮人奴隷の激増ということがあり、長崎の奴隷市場の主役は朝鮮人ということになる。長崎の奴隷市場は彼らによって飽和状態になり、需要供給のバランスが崩れて取引価格の低下を招いたということが史料上に現れる。なお、バテレン追放令は、秀吉が九州の現状を見て取り組むべき政権としての課題を考えた上で出された一環だと言われているが、フロイスも伝えているように、その中にはポルトガル人が日本人を海外に商品として連れていったという問題がある。また、商用のために渡来するポルトガル人・シャム人・カンボジア人が多数の日本人を購入し、彼らから様々なものを略奪し奴隷として出国させているということが書かれている。ここで出てきているシャム人・カンボジア人については、慶長年間に、確かに東南アジアからの船というのが九州の港に入港している。これは、東南アジア産の鉛といったものが日本において非常に売れるようになった結果であったろうと思われるが、シャム人・カンボジア人も多くの日本人を買っていたことが推定される。

秀吉の禁令を受けて、イエズス会ではそれまでは容認していた奴隷取引をそのまま放置、黙認するということは自分たちの活動に現実的に支障が

あるに気づき、ポルトガル政庁に対して日本人の奴隷の取引禁止令を公布するように働きかけた。ちょうど時期的に朝鮮人の奴隷が増えていた時期でもあり、日本人の「奴隷」としての海外渡航は激減する。ただ、この後の日本人の東南アジアへの流入というのは盛んになっていくので、「奴隷」という形ではなく、「傭兵」とか「商人」とかといった他の形で日本を出て行く日本人が増加していったのであろうと思われる。

もともと南方諸島では弥勒信仰というものが盛んに行われているが、西表島のミルク（弥勒）祭りでは、ミルク様の仇役として外国人の奴隷商人でオホホという仇役が出てくる。これは女、子どもを奴隷として海外に連れ去る悪役だが、昔に外国人がやってきて女性や子どもを略奪していったという島内の伝説からきていて、この装束というのは確かに南蛮人のように見えたりもする。この伝承の素材になるものももし本当に近世初期からあるものならば、こうした下地があるのではないかと考えられる。

これまでの交易史や貿易史の中で、南蛮貿易における奴隷という存在に関して研究が進まなかった原因とは、イエズス会の資料に奴隷に関する動向というものは少なくはなかったが、「どのだれが、いくらで、だれに、いつ売られていったか」というところまでは明らかにならず、その取引が一種のタブーであったりして、研究テーマとして進展しがたいことがあった。改宗ユダヤ人の異端審問記録に財産として表れるこういった日本人の奴隷といった情報から、将来的には南蛮貿易における奴隷の取引に関する研究が発展していくのではないかと考える。



コメント①

橋本雄氏（北海道大学大学院准教授）

今日の午前に講演されたお二人は、どちらも研究仲間なので、「このような内容お話をされるだろう」と予想してコメントを準備してきたが、いい意味で裏切られた。事前にコメントのペーパーを準備してきたが、さきほどのお二人の講演をからめながらお話をさせていただきたい。私は今、日本史学講座というところで講義をしているが、全学教育、いわゆる一年生の教養講座も最低一つは担当している。その教養講座をどのように専門教育につなげていくか、ここ数年悩んでいる。「今頃このようなことに気がついたのか」と思われるかも知れないが、高校教育の現場のお話をうかがったりしながら考えたことをお話しするので、お気づきのことをご教授いただきたい。

標題は、「海域アジア史的世界史の面白さと難しさ」とした。海域アジア史という枠組みの中で考える世界史の面白さと難しさについてお話しする。海域アジアを舞台とするのだから、最大のアドバンテージは「複数の地域をつなぐ」ということにある。一見開わりの薄いように見える複数の地域が、実は深いところでつながっている。今日講演を頂いたお二人の話は、非常にグローバルで広域に視野が広がっている。これにどのような補助線を引くのか、により見えてくる新たな視野が海域アジア史の最大のメリットである。また、ただ「素晴らしい」と賛美するだけではなく、山内氏と日々お話ししているのは、等身大の歴史像を描かなければならないということ、特に海域史では気を遣わなければならないということである。対外関係史や国際交流史では、わからないことがあると、外に原因・由来を求め、頼ってしまう傾向があるように思われる。だから、今回のお話のように冊封体制といった枠組みが呼び戻されてしまう。つまり、実態以上の虚像・幻想が我々を襲いかねない。だから海域史をやる以上、過大評価は戒めなければならないと思う。むしろ、山内氏も私も、つながっているところはつながっているけれども、つながっていないところはつながっていない、ということを識別することが大切だと考えている。「風が吹けば桶屋が儲かる」のように、

一見つながりのなさそうな事柄がつながって見えたとき、とても面白く感じるのだが、勝手につながいではいけないというのは当たり前のことだ。

第一節は「つなげる」、第二節は「くらべる」とした。これは、桃木至朗氏や秋田氏が大阪大学で提起されていることであり、もとは、イギリス帝国史のパトリック・オプライアン氏の議論に由来する。「つなぐ」と「くらべる」は、歴史教育や世界史研究に求められていることであり、全く異論はないが、大学一年生の授業や、場合によっては専門課程、大学院の授業でも、「つないでみよう」「くらべてみよう」といってもなかなかできないものである。キーワードとしては素晴らしいが、あともう一步、つまり「つなぐ」を「つなぐ」必要がある。「つなぐ」とは因果関係や相関関係などさまざまなものがあるが、やはり「why」で因果律を重視するということになるし、「くらべる」ということでは、「how」「what」で様態を具体的に分析することが必要だろう。そうしなければ比較ができず、また比較することで見えてくる具体像というものがある。そこで、論文指導をする際に、「why」「what」「how」を使う訓練をしている。

山内氏の講演で言えば、「硫黄はなぜ中国に輸出されたのか」という問についてである。考えてみれば当たり前の話だが、宋が西方・北方の諸民族と戦争する際に、硫黄を必要としていたこと、その供給先が日本であったこと、というのは目の覚めるような話だ。似たようなことは明朝についても言える。レジュメとは離れるが、16世紀半ばに後期倭寇、そして南蛮貿易が本格化することについて、それは何か関連がありそうだが、どう関連するのかがよくわからない、というのが岡氏以前の研究状況であった。つまり、諸民族が雑居していること、ここで中国人海賊とポルトガル商人が出会ったことなどはわかっていたが、それをマカオなどを舞台として克明につなげた、というのが岡氏である。このように、今までよくわからなかった部分をつなげている、例えば南蛮交易の起源にザビエルの強い勧めがあるなどの、はっとすることがらが、海域史研究の面白さなのだと思う。また、海域史研究の面白さは、こうしたはっとするような面白さが見つけられるということだけでなく、その対象とする範囲が実は海域史のみではない、海域史にとどまらないということでもある。ミニマムな地域として考えるのであれば、例えば私が研究している対馬や博多などがあるが、それ

が少し広がる。環東シナ海域になって、さらに硫黄の問題や北虜南倭の問題を考えると東部ユーラシアに広がっていく。そして、南シナ海・インド洋・地中海までつながりが広がっていく。そして、今回の講演のお話では、太平洋も越えてしまったわけである。

今までの研究によって、個々の事実が明らかになってきているが、それらを独立的に扱うのではなく、できる限り、できる限りというのは決して無理をするということではなく、着実に関連づけて構造史を描いていく。ここでいう構造史とは、含意はいくつかあるが、きちんと因果律を理解できるという意味合いである。海域史はそういった構造を描くことのできる方法である、ということが重要なのだと思われる。ただし、海域史がすばらしいと言っても、それを現場でどう用いるか。現場の高校教員のご意見をうかがいたいところだが、こうしたマイクロからマクロに広がる、マクロ的な視点は、地誌的世界史というよりも系統的の世界史という世界史に本来向いているはずである。

つまり、「こうした時代にはこうした問題群がある」といった「何世紀の世界」のような時代の輪切りは、独立した個々の事項を地図上に羅列しているに過ぎないと思うが、そうではなく、今日の講演の話にあったようなつながりで歴史を見ていく。話とはぶが、羽田氏の時系列を無視して輪切りで世界を見ていこうという考えは、理解はできるが、時系列で見ていこうといってももう少し時間に幅を持たせてみるべきではないだろうか。例えば中国の文明が周辺諸国にある程度広がっていくとすると、その過程で、中国の文化が変容し取捨選択されていく。例えば、皇帝は龍というのが東アジアの常識であり、鳳凰は后が用いるものなのに、日本では天皇は鳳凰を用いるなどの変容がある。そうしたことに面白さがあると思うが、そうしたものは時間軸を外してこそ見えてくるものではないだろうか。結局時代で輪切りにして世界を見ようとしても、結果として時間軸にとらわれているのだと思う。そうではなく、テーマによっては幅の広い輪切りの仕方があるのではないかと、そういった形で世界史を語れないだろうか考える。ただ、そういった因果律を重視する、さかのぼり世界史のようなものを組み入れた授業や教科書といったものは果たして可能なのだろうか考えると、面白いのだけれどもやっぱり難しいのではないかと。具体的な解決手段を考えることもまた難しいと思う。

最後に、一点だけ申し上げておきたいのは、今回の講演で、民族や宗教に関わるものが扱われたが、改宗ユダヤ人は、果たして何人と呼ぶのがふさわしいのだろうか、という問題である。民族の定義も難しいのは周知のことだが、そういった問題に実証的に「このようなアイデンティティもあったんだ」「このような切り口もあったんだ」「この人はこのような属性ももっている」といったことを見せるということも重要だと思うし、私自身が授業でやっていることでもあるが、授業の中で不断に問を連鎖させていくことや既存の概念にチャレンジさせていく、そういった具体的な素材を海域史はふんだんにもっているのではないかと思う。私は学生に「他人の概念にのると、ろくなことはない」と常々言っており、まず定義を疑うこと、概念を崩すこと、自分なりの定義をつくることを指導している。おそらくこういったことが、学生たちが社会人になったときに必要とされる「ものを考える力」を与えるトレーニングになるだろうと思っている。これが、海域史の面白さであり有効性であるが、概念や定義を毎回崩していると授業にならないという問題もあり、どこで線引きすべきかということが難しい点である。



コメント②

鳥越泰彦氏（麻布中学・高等学校教諭）

何度かこのような場でお話させていただいているが、同じ高校教員としての悩みも含めてお話したいと思う。一つは、「海域史」について今日の講演や研究について自分が思ったこと、もう一つは、高校教員として歴史教育の中に海域史をどう

取り込んでいくべきかということに関してである。

まず、海域史の研究に関してだが、「海域史から見ると現在ほどのような時代なのだろう」というのである。例えば、主権国家という概念が成立し定着していく中で、領海という考え方も生まれてきたと考えると、海上保安庁という組織があるということがもう昔とは違う海域世界を生み出していると考えてよいのだろうか。一方で、ソマリアやマラッカには海賊なるものが出没しているというニュースに接すると、権力の隙間のような場所に海賊は現れるのか、などと考えたりもする。講演された先生方には、前近代だけではなく、近代・現代につながる見取り図のようなものを教えていただけると大変ありがたいし、試論を示していただけると大変面白いのではないかと考えている。海域史を勉強されている方に、「海賊は陸上権力の従属変数のような関係にある」と考えるような発想が、間違っているのか、あるいはそういったことも言えるのかをお伺いできればと考えている。

岡氏の講演にあった奴隷の問題と関係して、二つ質問したい。一つは、奴隷は自分のことを、あるいは自分のアイデンティティをどのように語っているのか、という問題である。例えば、「日本」という言葉が出てきていることの方に驚かされた。というのも、当時の人々にとって「日本」というより「豊後」などといったほうがしっくりくるのかと思ったからである。16世紀の日本の人々のアイデンティティ、もしくは、岡氏の研究にでてきたような日本とポルトガルの混血のような人は自分のことをどのように語っていたのだろうか、ということが気になった。最近、自分が勤務する学校で、複数のアイデンティティを持つ生徒を教える機会が増えてきた。事例を挙げると、父がアイルランド人で、母が日本人、本人は東大でアラブの研究を行っていて今はエジプトに行っているという卒業生がいる。その卒業生との会話で、「この夏、僕はアイルランドです」というのに対し、私が「アイルランドに行くんだね」と言うと、「いいえ、アイルランドに帰るんです」という返事が返ってくる。その生徒は、一つのアイデンティティしか持たない私に対して、いい意味で揶揄するようなことをしばしば口にする生徒だが、そういった生徒や、在日コリアンの生徒などもおり、両親ともに日本国籍の生徒だったとしても、子どもたちにとってそうしたことを考えるのは重要な

ことではないかと思っている。

また、岡氏の講演にあったように、当時の日本がそんなに多くの奴隷を海外に出せるほどの余力があったのか、ということもうかがいたい。例えば、大友氏と島津氏が戦争して兵を取り合うというのは、労働力を取り合っているという解釈が可能である。前近代においては、労働力は貴重な資産と考えられるからである。それを奴隷として海外に売却するというのは、大きな損失なのではないかと思われる。

次に、歴史教育と海域史の問題だが、こうした新しい定義を受けると、いったい高校世界史は何をどこまでやればいいのか、という問題、悩みに直面する。高校世界史では、通史を終えるだけでも必死なのに、新しいことが次々とわかってくると、それをどう授業に組み入れるかが本当に困るところである。一方で、授業の中で生徒が何らかの時系列的な因果律を「つなげる」「くらべる」作業をすることは必要だと思われるし、その素材として海域史が有効だということも理解できる。けれども、それは大学でやることと考えて、高校ではやらなくてよいことととらえてもいいのか、悩ましいところでもある。岡氏の研究のように、多様なアイデンティティをもつ一人の人物に迫り、追いかけていくというのも魅力的なことである。また山内氏の硫黄に関する研究についても、このようなテーマを突き詰めていくと、化学や地学の教員と協力して総合的な学習の中で取り組むことも可能なのではないかとも思う。そう考えると、高校の授業の中に受け入れていけるテーマもあるかもしれないと感じた。

橋本氏のお話の中にあつたように、例えば「東アジア」という概念を批判することで見えてくる新しい視点があるだろうと感じながらも、今の高校生には地域世界を理解するのも大変という状況の中で、その「地域」のとらえ方もゆるやかなものだったりするとさらに理解を困難にするのではないかという現実もある。例えば、東アジア世界が時代によって伸縮したり、地中海世界が興ったり滅んだりすると、もう生徒は耐えられなくなってしまふ。そのような点を考慮しながら授業にどう活かしていくかが高校の教員としての悩みどころである。そうした時に、方便として「東アジア」を教えつつも、次の段階で相対化させていくという授業で良いのか、それとも「東アジア」として教えることの弊害の方が強いのだろうか、そういった点についてもうかがいたい。



講師より① 山内晋次氏

橋本氏のコメントについてだが、私も共感していることは「困ったときの対外関係史頼み」という点である。今までの日本史研究において理解できないこと、説明のつかないことがらに出会うと、それを外の世界の話としてしまうことがあると思われる。結局対外関係史頼みとなってしまうわけだが、それを私たちが解決できないとわかると「対外関係史もたいしたことはない」と言われてしまうが、私は違うと思う。同じことが考古学にも言える。考古学にも「困ったときの祭祀頼み」ということが言われる。今までの説明が通用しない遺構は全部祭祀跡にしてしまおう、という論理と同じことだと思う。橋本氏も過大評価への戒めというお話をされたが、例えば、昨年大河ドラマにあった平清盛が神戸で盛んに貿易をしていた、という描写は誤りだ。誰がそういうことを言っているかという、それは対外関係史以外の研究者である。平氏政権の専門家といわれる研究者でも、貿易に関しては自分では研究せず、昔からの通説をそのまま思い込みで語り、都がどのようにつくられようとしていたかなど細かい事項の研究はしても、対外関係史には踏み込まず、盛んに貿易が行われているということを広大解釈している。私たちのように対外関係史を専門にしている者は、中国の商人がほとんど神戸には来ていないということがわかっている。中国の商人が神戸に来ていたということを証明する考古学的証拠も文献も何も残ってはいない。こういったことは、過大な評価や期待によるものではないかと思うが、それをむしろ私たちは冷静に「そうではない」と言い続

けていかなければならないのだと思う。そうしなければ正確な歴史像はつかめない。

鳥越氏のコメントにもあったが、確かに海域史には難しい側面がある。現在、日本では私たちは「海域史」と呼んでいるが、中国・韓国では「海洋史」と呼んでいる。これは漢字でいえば一字違いだが、内容は大きく異なる。中国・韓国にとっては海洋覇権の問題に深く関わってくる。特に中国では、海洋史研究には国費が大量に投下されている。南沙諸島などの周辺で沈没船の発見をし、それが宋代の船だったからここは中国領だ、と主張するような研究にお金が費やされている。韓国にも似たような点があり、やはり海洋覇権をにらみ、海洋史の研究に貢献する財団なども設立されているが、本来文献などもあまり残っておらず、わからないことであるにもかかわらず、いかにもわかったかのように宣伝されてしまうこともある。そういった海洋史では、「海」しか見ていないことが多い。私たちが研究している海域史は、海洋覇権の問題を意識することなく、今まで見えなかった歴史を復元したいということと、陸と海の関係性をとらえていこうという点が特徴だと思う。これは、12月に木浦で開催されるシンポジウムでも、韓国側に伝えていきたいと思っている。こうした違いが領土問題にも関わってきているのではないかと思われる。

鳥越氏のコメントにあった、海域史から見ると現在は何のような時代かという間に関して考えたい。これには、尖閣諸島や北方領土問題、竹島の問題などに関わるのだと思うが、ここで主張されるものにいわゆる固有領土論がある。「固有の領土である」ということはゆるがないという主張である。それは、歴史の流れの中からみて、いかに危ういものであることか。「先に領土として領有を宣言してしまえばそれでいい」という国際海洋法の原則に基づいて、適切に処理されていると主張されるが、その国際法が成立したのもつい最近の出来事なのである。確かに、現在の国際法の考えから言うと間違っていないのかもしれないが、それを過去にさかのぼってあたかも最初から固有の領土であると証明されるような理解はやはり問題があると思われるし、意図的にそのように理解しようとしている向きもある。海域史は、そうした危うさのある部分を否定できるような研究を今までもしてきているのではないかと思う。しかし、そういうことを言うと「弱腰だ」と言われてしまう。例えば、竹島を共同管理したらよいのではな

いか、と主張すれば、強烈な批判を受けてしまうが、海域史研究の立場からすると共同管理論はやはり魅力的である。共同管理というより、竹島にしても尖閣諸島にしても「手をつけない」という考えが魅力的なのだが、実際に与那国や八重山の人々には、尖閣諸島に中国が進出してくるのではないかという恐怖感もあることを考えると、声高には言えなくなるが、少なくとも歴史的には間違っていないと思う。

また、海域史は陸上権力の従属変数なのか、という質問もあったが、そう見える場合、そう見える地域といったものがあると思われる。特に東アジア海域を考えると、陸上権力が海上をコントロールしようとするところがある。事例は明王朝である。ところが、インド洋の海域史の研究を見ると、意外と陸上の権力者は興味を持っていない。港はいくつもあるのだが、それを陸上権力が確実に支配を強化しようとしているかという、そうではない。税金さえ納めてくれればそれでよい、という観がある。そういった研究の成果が少しずつ見えてきている。東アジア海域とインド洋海域におけるその差はどこにあるのだろうかということは、それぞれの研究者が話し合っていかなければならないことである。東南アジア史で言えば、港市国家論をどう解釈するか、という議論に繋がっていくのではないかと思う。

歴史教育について、新しい研究成果を授業にどう組み込んでいけばよいのかという質問に対し、今のままではもう飽和状態なので新たに組み込んでいくのは難しいのではないかと思う。そのため、羽田氏や桃木氏が主張するように、やはりどこかを捨てなければならないのだと思う。例えば、古代ローマの皇帝の名前を覚えさせることをやめて、海域史を組み込む、というようなことである。日本史でも同様である。用語集というものがあるが、頻度が高いとされている用語でも歴史的に考えればそれほど重要ではない、ということもよくある。どこを削ればよいか、という具体的なものは難しいが、手法としては適切なのではないかと思う。

「地域世界」をなかなか理解しにくいという生徒たちに方便として「東アジア」というまとまりが考えられるということを教えることは問題がないと考える。ただ今まではそれで終わっていたのではないかと思う。「では東アジアとはどのように構成されているのか」という問に対して「日中韓の三カ国で構成されているから覚えなさい」と

いうだけではなく、それと同時に生徒に教えなければいけないのは「世界は主観である」ということである。世界は自分たちの主観で組み替えていくこともできること、その上で問題や時代によって世界の組み替えを自分たち自身が考えていかなければならないこと、世界は決して一対一の対応ではないことを教えていかなければならないと思う。



講師より② 岡美穂子氏

いろいろな示唆に富むコメントであったので、それに明確に応えられるかどうかかわからないが、私の方から現場の高校教員にうかがいたいこともある。たとえば、世界史の中でナショナリズムというものをどう教えているのだろうか。それが鳥越氏の最初のコメントとも関わってくるのではないかと思う。山内氏が言われたように、世界の見方は、おそらく自分が何人か、自分のアイデンティティをどこに置くかによって全く違うものになるのではないかと思う。たぶん、歴史学とナショナリズムは、歴史学者個人がたとえどれほどマルキストであったりアンチであったりしても、切っても切り離せない愛憎の関係のようなものなのではないだろうか。私が初めてポルトガルに留学したのが20年くらい前のことだが、そのころのポルトガルの教科書には、「日本はポルトガル領だった」という記述があり、少なくとも長崎はポルトガル領だと考えられていた。私自身は、ごく最近までそのような見方に対しても憤りを感じていたが、最近では、ナショナリズムを背負っていない歴史というものを高等学校の教育の現場で教えることにどう向き合うべきなのか、それはもう

国の意識の問題であると切実に考えざるを得ない状況である。例えば、ナショナリズムを個人の中に構築させるために歴史教育があると完全に肯定している国があるが、日本はそれとは違うと客観的に感じている。海域史は日本人だからできたことなのではないか。日本が島国で、海を通じて海外とのつながりをもってさまざまなことがらを発達させてきた国だという意識が日本人の中に少なからずあるからこそ、海域史というものをポジティブにとらえられたのではないかと思っている。日本発の海域史を山内氏や橋本氏が諸外国に紹介する時、その国それぞれのナショナリズムとの相克ということが非常に大きな問題となるのではないかと思われる。私は西洋中心主義史観からの脱却を大きなセオリーにしようと考えて最初の著書の前書きにも書いた。私も、少し歴史学の中にいる時間が長くなってきたが、未だに英語で発信される欧米研究者の言説というものがまず相対化する対象であり、お手本になりがちであることを考えれば、日本初の国際的メジャーになりうる研究もやはり英語で発信されていかなければ、西洋中心主義ではない地域史、世界史の発展は難しいのではないかと考えている。

海域史から見ると現代はどのような時代か、という質問だが、これについてはカルタスと呼ばれる通行許可証の話をしたい。カルタスは、広大なインド洋を航行する全ての船で必要とされたものではなく、ポルトガル人が要塞付近を通行し通商したい場合のみ携行させた通行許可証のことである。インド洋のどこでもカルタスの携行が求められていたわけではなく、カルタスを携行していないから略奪に遭うというわけでもない。カルタスは非常に地域、ルートを限定した通行許可証であったと言える。それは、国家としての安全保障という概念は全くなく、利益が全てであるということに基づいていると思う。現代は実際には海底に油田があるから領有を主張しているのだろうが、それをナショナリズムという繊細な問題にすり替え、決着をつけようとしていることが問題を難しくしているのではないかと思われる。逆にスペインとポルトガルの大航海時代の場合で言えば、実際にはトリデシリャス条約により大西洋上にしか子午線が引かれていない。当時は、地球がどれくらい大きさであるかもはっきりわかっておらず、その線を地球の反対側にもってきたらどうなるのか平面の地図を広げて議論していたが、実はトルデシリャス条約の対蹠線を今わかってい

る地球儀上に引くとモロッカ諸島はスペイン領になってしまう。しかし、スペインはそれほど大きくない金額でポルトガルに売り渡してしまう。国家の面子が今ほど重視されない時代においては、アジアの交易圏の分割に関しては金銭で解決しうる問題だったということだと思う。しかし、南米のブラジルと他のスペイン植民地との間の境界線を巡る問題ではかなり熾烈な戦争が行われており、それは金銭では解決できない国家の面子のなかった問題であったということだと思われる。おそらく中南米に関しては自分たちのテリトリーであるが、アジアにはそれぞれの地域にそれぞれの王権というものがあるという認識があったため、そこでは単なる経済上、通商上の問題であることから金銭で解決しえたのであろうと考えることができる。

海域アジア史は陸上権力の従属変数か、という問に対しては、国家史や政治史の立場からはそう言えるのではないかと思うが、対国家間でも一国史観でも二地域間交渉史でもない、もっと多地域間のインターナショナルの研究をすることで描ける世界があると考えの方が私個人としては面白いと感じている。おそらく日本人の関心もそういったところに移っていつているのではないかと思う。国家史やその国の政治史を全く知らずに海域史だけを見ることには問題もあると思うが、一国史だけ見ることに全く面白みは感じられない。海域史というのは、今までの研究でもれていたり光が当たっていなかったものに、より光をあてやすいアプローチの方法であると考えられる。海賊や奴隷とは、史料がほとんど残りにくい存在である。海賊とよばれる集団が、この時期この場所を荒らしていたという、「何となく」わかっていることだけでなく、海賊のリーダーが誰で、構成員が誰で、海賊行為だけではなく地域によっては商館をたて交易していたというような後期倭寇の具体的な実態がわかってきて、中国側からの倭寇＝海賊のようなとらえ方ばかりではなく、商取引上の関係が重視されるようになること対話の糸口が見えてくるのではないか。私は「従属的」とは考えないが、政治史という世界があって、それにもれることがらを拾うのが海域史だと思う。歴史学の構築において、現代はもう政治史だけではどうにもならないという考えが認識されている時代だと思われるので、海域史はまだ伸びしろのある学問なのではないかと思っている。

奴隷のアイデンティティについては、確かに彼

らが自らを「日本人」として認識したのは海外に出てからかもしれない。フランシス・ハボンもそうだが、現在もセビリヤの近くにハボン姓の人が多く残っており、彼らが日本人かどうか DNA 鑑定をする研究に大きな科研費がついていて、この研究チームの代表者から何か史料で実証できないかと問われたこともある。今の日本とスペインの外交関係の中では、彼らは慶長遣欧使節と呼ばれた東北の武士の子孫であることを強調したいようだが、奴隷だった人、特別な名字のなかった人、名字はあってもそれにこだわらなかつた人全員にハボンという姓が付きまゝす。そのため、日本人というアイデンティティは日本国内にいたときにはそれほどなかつたとしても、海外に行つてからその意識が形成されて、出身地が違つていたとしても、一応お互いにわかり合える同じ言語を話すものとしての民族意識が開化し同胞意識が芽生えていったのではないかと思われ。

混血児が自分のことをどう語るかについては、史料によつて異なるが、例えば父がポルトガル人で母が日本人、あるいはマレー人であつたりした場合にどう呼ばれるかは、洗礼を受けたかどうかというのも一つの大きな要因である。もし洗礼を受けていて母親が奴隷身分でなければ、ポルトガル人ということになる。母親が奴隷身分であれば、往々にして子どもも奴隷身分となり、自分の父から売られてしまつたりすることもある。レジュメにもあるヴィセンテ・ロドリゲスは、ポルトガル人と日本人の混血だが、史料には単にメスティンとして出てくる。

日本人が多く海外に出て行くことは損失なのではないのかという点については、それは恐らく政権の主体の立場からはその通りだと思ふ。しかし、人買い商人や子どもを売る親の立場から考えると、それは明日食べるものの問題であつて、国益がどうであるとか、将来国にとって損失であるとか、そういったことは考えていなかったと思ふ。子どもが食べ物を与えられるのであれば、親元で飢え死にするよりは外国人のもとで奉公する方がよいという感覚であつたらうと思われる。従つて、豊臣秀吉が禁令を出したのは今後の日本にとって損失であると考えたからであつたとしても、人身売買に携わる人にはそのような意識はなかつたと思つている。

東アジアという世界の実態がある、あるいはないといわれたら困るという高校教育現場の声は、まさにその通りだと思ふ。私も地域としての区分

はあつたほうがよいと思つている。もちろん研究者が、東アジア世界、東アジア海域世界というものをもより共通理解を得られるようなものに変えていくことができるのであれば、そのような議論は研究者の中であつた方がよいと思ふが、高校までの世界史であれば、地域の区分が明確になつていない中で歴史を勉強することはとても難しいことなのではないかと思ふ。しかし、その地域が、この時代の他のどの地域の影響をどのように受けて、どのように変わつていったかなど、橋本氏が言われた「why」「how」「what」を意識しながらその地域の変容というものを他者との関係性の中で説明できる部分もあると思ふ。一つの世界が自明のものとして存在するわけではないことを意識しながら、変わつていく世界、一体化していく世界という認識の中で、一体化していくまではやはり地域という概念があつたほうがよいのではないかと考える。認識するかしないか、ということが大切なのだと思ふ。



司会より

吉嶺茂樹氏（北海道有朋高等学校教諭）

昨年度の講演をいただいた羽田正氏が編者となり、こちらにいらっしゃる山内氏、岡氏、橋本氏が執筆され、東大出版会から出版された『東アジア海域に漕ぎ出す』をお読みいただけると今日の話がフィードバックできるのではないかと思ふ。おそらく、海域世界の繋がりを世界史教育の中で積極的に取り上げようとしているのは日本だけかもしれない。みなさん、どうぞ自信を持っていただければと思ふ。

第45回研究会のご案内

日 時 平成26年8月8日（金）9：00～

会 場 札幌市教育文化会館 研修室403
（札幌市中央区北1条西13丁目）

講 師 秋田 茂 氏（大阪大学大学院教授）

※その他、道外講師を予定しています。

研究発表 未定（募集中）

※前日に同会場で日本史研究会大会が行われます。

◆編集後記◆

会報第20号を発行致します。日頃からの会員の皆様のご協力・ご支援に、改めて御礼を申し上げます。また、記録をご担当頂きました先生方には、お忙しい中にも関わらず、原稿を作成して頂き、誠にありがとうございました。編集作業の遅れや不備な点など、関係の先生方にご迷惑をおかけしましたことお詫び致します。今後とも紙面の充実に力を入れて参りますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（札幌南・藤井秀樹）